

地域協働における大槌高校の取り組みについて

岩手県立大槌高等学校

1. 地域協働事業 導入の経緯

設定した2つの課題

①被災した地域の復興を担う
リーダーの育成

東日本大震災津波によって人口の1割を失った地域において、復興やその先の地域を担うリーダーの育成を行う必要があった。

②地方創生の核となる
高校の魅力化

震災以前から人口減少が進む地域において高校が核の1つとなり、人材育成の拠点や地域活性化の一助になる必要があった。



設定した2つの課題

協働体制(コンソーシアムの構築)

大槌高校魅力化構想会議の設置・運営
→大槌高校を支える協働体制の構築

大槌高校魅力化構想骨子の策定
→目指す方向性・ビジョンの策定

地域と協働したカリキュラムの開発

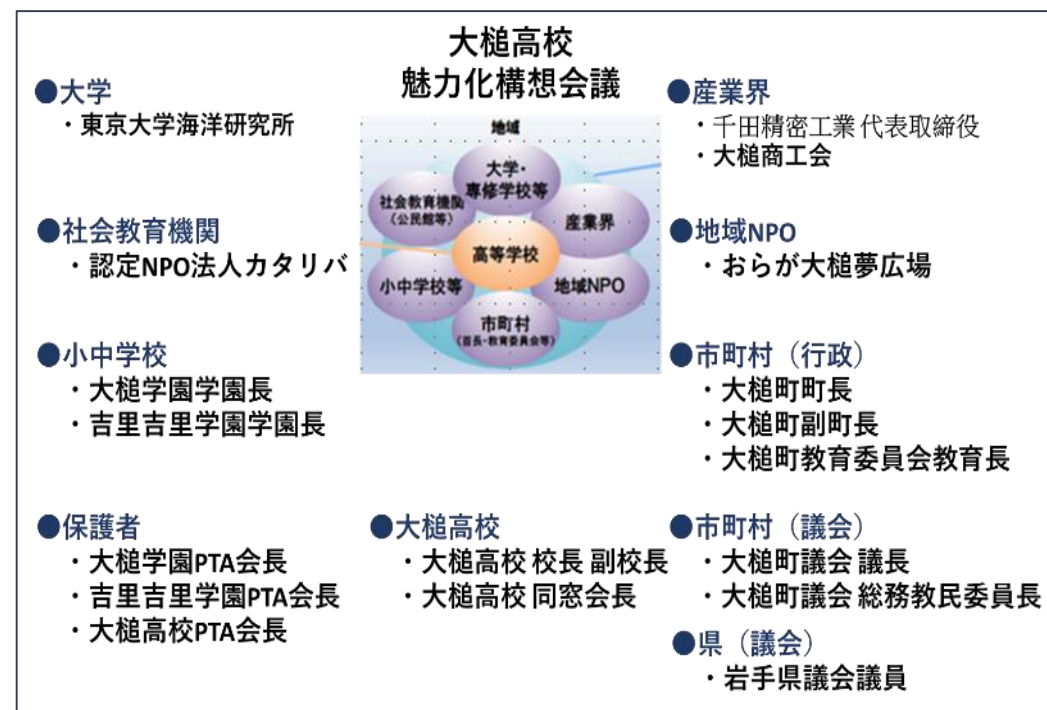
学校設定科目「三陸みらい探究」
→総合的な学習(探究)の時間の再設計・開発

学校設定教科「地域みらい学」
→5教科における地域と協働した
探究科目の取り組み

2. コンソーシアムの構成

大槌高校魅力化構想会議の特徴

- **会長を町長に**
→人材や予算の面で町行政の積極的な支援に
- **中学校長や保護者の参加**
→子ども目線で改善すべき取り組みについて率直な意見を
- **研究機関の参加**
→大学関係機関が入ること、地域協働科目や教育課程外の探究活動の支援に



大槌高校魅力化構想会議の内容(例)

- 年度事業計画の承認
- 年度事業計画の評価、次年度改善事項の確認
- 教員との熟議
- 生徒の探究活動報告
- 校則や部活動等 生活に関する報告



3. 高校魅力化構想骨子の検討の流れ

教員・生徒・地域熟議

「どんな生徒を育てたいのか・どんな大人になりたいのか・どんな高校にしたいのか」
という問いに対してそれぞれが熟議

教員熟議(職員全員)



生徒熟議(生徒全員)



地域熟議(地域120人)



大槌高校魅力化構想会議で決議

魅力化コンセプト、目指す人材像、育む土壌(生徒を支える環境)、学校の目指す姿をまとめ、
全員の目指すべき方向性を共有

魅力化構想会議より本事業の管理機関である岩手県教育委員会に提出

4. 大槌高校魅力化構想骨子

魅力化
コンセプト

ハンマー
大海を航る、大槌を持つとう

目指す
人材像

自立

意志がある

協働

仲間とともにある

創造

逆境から創り出す

育む土壌

海

地域

空

希望

山

多様性

風

挑戦

学校の
目指す姿

①

生徒一人ひとりの目標が応援され、
それぞれの持つ強み（大槌“ハンマー”）を見つけられる学校

②

未来社会に生きる力をつける学校

③

多様な価値観で多様な個性を支える学校

④

地域が学びを育て、学びが地域を育てる学校

5. 大槌高校の開発した探究科目(三陸みらい探究)

地域の課題に目を向け、主体的な学びを通して三陸地域の復興を担う 人材を育成することを目指す (令和元年度から週に2時間実施)

3年生


「進路に繋げる」
就職・進学に活かす

進路へとつなげる学び



オンラインを活用して大学教員や就職したい業界職種の先輩にヒアリングすることを通して、探究の間を深めていく
Ex:20年後に金属加工業で必要とされる力は？等

18年間で身につけた学び

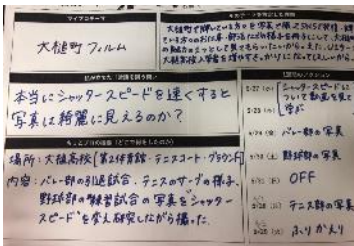


幼小中高18年間で身につけた力を生徒自身が名前を付け「〇〇力」としてローカルテレビなどを通じて、地域に対して発信。

2年生

「テーマを探究する」
マイプロジェクトをつくる

マイプロジェクト



自らの生き方なり方と不可分の間を見つけ、生徒それぞれがプロジェクトを立案。

マイプロジェクト




地域と協力しながら解決策を実際に行い、振り返りの中で、自らの学びを探る

1年生

「興味関心を広げる」
自分のテーマを見つける

自分プレゼン



町内中学生に対して自己紹介プレゼンを行うことを通して、自分の興味関心を探る

SIMulation大槌2030



町議会議員から出されたお題を生徒が町内外のFWで解決策を考え、提言を行う。
地域に関する広い興味関心を喚起

6. 大槌高校の開発した探究科目(地域みらい学) —地域協働リベラルアーツカリキュラム—

1 リベラルアーツとは？

リベラルアーツとは「自由な学び」であり教科の垣根を越えて知識を互いに関連づけ、統合し、広く知識の交流をすることを通して批判的な思考力と創造的な発想力の涵養を目指す教育です。

2 本校の目指すリベラルアーツカリキュラム

本校の立地する地域には復興や人口減少などの解決の難しい課題が山積みです。実際に起こっている地域や社会の抱える複雑な課題に自ら問いを立て、教科で学んだベーシックな学力を活かしながら、探究することのできる力を育みます。

3 学校設定教科「地域みらい学」とは？

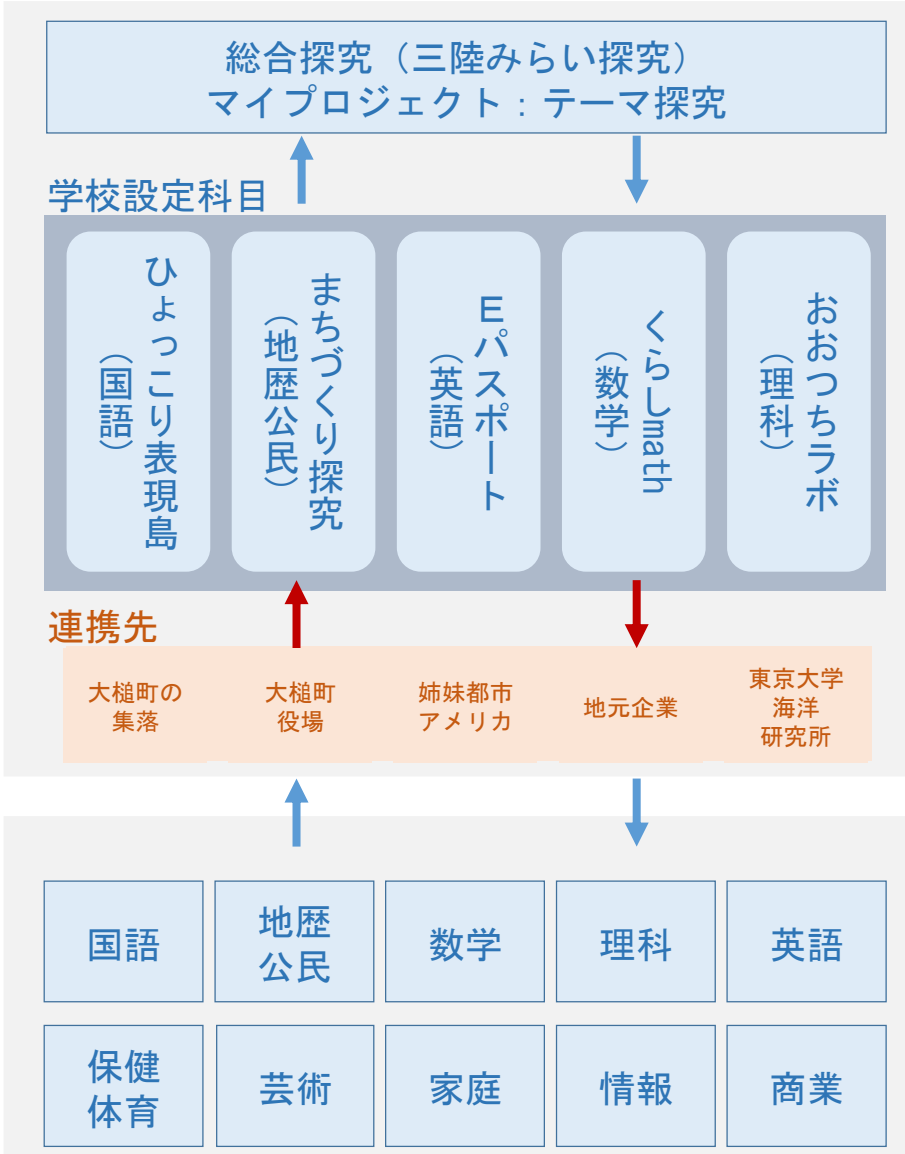
地域みらい学の特徴は以下の4点です。

- 主体性** 生徒が自ら考えて行動する様々な題材を選定し、学習者中心の授業を行います。
- 地域性** 地域が実際に直面している課題（オーセンティックな課題）に地域の方々と共に解決策を探りながら協働し、深く学んでいきます。
- 横断性** 各教科で得た知識を応用し探究的な学習を進め、その学習を深い専門教科の学びに発展させていきます。
- 開放性** 発表会や映像など成果物や学びのプロセスを地域社会に広く発信していきます。

■大槌高校のリベラルアーツカリキュラム

探究教科…地域みらい学
(知識の統合や探究力を育む科目)

一般教科
(思考基礎力を育む科目)



7. 大槌高校の開発した探究科目(地域みらい学 各教科の詳細)

①ひょっこり表現島(国語)

地域言語を用い地域独特の表現を深く理解することにより、より多彩な「伝える力」「表現力」を育成する手立てとする。



▲各地区での方言「ほっこ」の使用状況の調査

②まちづくり探究(地歴公民)

複雑さが増す社会においては、正解が一つに定まることはなく、様々な課題(矛盾・葛藤・衝突)が生まれる。課題の解決は容易ではないが、それぞれの主張の背景を理解しながら、解決の方向性を探る力をつける。



▲大槌町文化交流センターおしゃっちのカルチャーイベントのヒアリングの様子

③くらしmath(数学)

生活をする中で気づかないうちに様々な分野で数学の知識が活用されている。具体的に身近な分野で活用されている数学を学ぶことにより数学の良さを認識する。また数学を用いて暮らしの中にある課題を発見し、解決しようとする態度の育成を目指す。



▲三角比を用いて建物の高さを算出(大槌駅)

④Eパスポート(英語)

教科書では扱わなかったテーマや場面を設定し、発展的な英語によるコミュニケーション能力を育成する。特に、4技能(「読む」「書く」「聞く」「話す(発表・やりとり)」)をバランス良く取り入れながら、多様な場面での実践的な英語によるコミュニケーション能力の育成を重視する。



▲防災スリッパの作り方をNSの先生に実演

⑤おおつちラボ(理科)

既習した学習内容を相互に関連付けることで、より深い理解の定着を目指す。特に課題解決学習に取り組むことで問題に対しての仮説の設定や、実験・検証方法等を自ら模索することで、科学的課題への関心、理解を深める。



▲レポート「カップ麺を鍋で茹でると・・・？」



▲桃畑孵化場視察の様子

8. 大槌高校地域協働事業 ロジックモデル



カリキュラム
開発等専門家(常駐)
の配置

コンソーシアムの
設置

地域協働学習
実施支援員(常駐)
2名の配置

学校設定教科
「地域みらい学」の
カリキュラム開発

**地域みらい学
(教育課程内)の実践**

- 町立学校との連携
(中・義務教育学校等との連携の取り組み)
- 5教科の学びを探究的な学びにする探究科目の設定
- 町行政事業を活用した学習や町行政との連携
(例:SIM)
- 自立した自己と向き合う探究
(マイプロや自分紹介プレゼンの機会)

教育課程外の連携

- NPOとの連携による放課後社会教育との連携
- 町内に存置する大学機関との高大接続に向けた連携

**主体的・活動的探究テーマ
(マイプロジェクト)の実践**

- 身近な探究課題の設定
- 主体的な興味関心テーマの設定
- リアルな(オーセンティックな)課題との出会い
- 郷土への深い思いの確認と醸成
- 学究領域(研究領域)との接続

下記の資質能力を備えた人材の育成

- 「自立」
主体的に行動できる
- 「協働」
多様な人々と協力する
- 「創造」
逆境から創り出す

**高校生が学びの
ロールモデルとなり
影響を与える**

- 関係人口を含めた町民で地域活動・行事の活性化
- 一人ひとりの自己実現意欲・力の向上
- 地域内での課題解決・価値創造の取り組みが増加
- 生産年齢人口増加により町が活性化

町教育大綱

**「ふるさとが
学びを育て
学びがふるさと
を育てる町
おおつち」
の実現**

影響が教育に還流する

9. 大槌高校魅力化の定量定性評価 (R1→R2)

数値で見る変化

生徒の変化	初年度	2年目	差分
主体性に関わる自己認識 (自己肯定感・粘り強さ等)	59%	66%	7%↑
協働性に関わる自己認識 (受容力・対話力等)	73%	75%	2%↑
探究性に関わる自己認識 (学びの意欲・批判的思考力等)	60%	63%	3%↑
社会性に関わる自己認識 (地域・社会貢献意識等)	50%	60%	10%↑
教職員の変化	初年度	2年目	差分
失敗してもよいという 安全・安心な雰囲気がある	58%	95%	37%↑
人の挑戦に関わらせて もらえる機会がある	58%	90%	32%↑
立場や役割をこえて 協働する機会がある	75%	100%	25%↑
本音を気兼ねなく発言できる 雰囲気がある	50%	70%	20%↑

その他の変化

(生徒に関すること)

- 生徒が自分の考えを言うようになり、学校全体が明るくなった。(表現力・主張力の向上)
- 学校外の地域活動への積極的な参加が見られるようになった。(地域貢献意欲の向上)
- 国公立大学進学意欲・実績の向上
H300人→R12人→R25人
(探究力、言語化力の向上、志望理由の明確化)

(教職員や学校全体の取り組みに関すること)

- 東京大学と連携した放課後の研究会活動「はま研究会」や校則検討委員会等生徒の興味関心に基づいた活動が開始
(生徒の活動意欲や活動量の増加)
- 生徒と自由に発言する機会が増え生徒と議論できる関係に
(抑圧的關係から対等な關係へ)
- 職員室の中で自由な発言をしても否定されない。
(抑圧的關係から対等な關係へ)

(その他)

- 入学者がR1年度に比べて学区内で唯一増加した学校に
(45%UP R142人→R361人)